

## 水俣病は、過去ではない

写真は朝日 3 日 1 面掲載のユージン・スミスさん撮影の田中実子さん。何かを見ている。人と目が合うが、表情は変わらない。その瞳は、また別の何かに向かう。田中実子さんは今年、68 歳になった。2 歳 11 カ月で水俣病を発症し、言葉を失った。65 年間、食事も排泄処理も入浴も、自分ではできない。水俣病の原因物質メチル水銀は脳に深刻なダメージを残した。

「あっ、ユージン……とても懐かしい」9 月 11 日、胎児性水俣病患者の坂本しのぶさん(65)は、熊本県水俣市の隣町にあるつなぎ美術館で始まったユージンらの作品展を訪れた。写真の中に 10 代だった自分がある。車いすから見上げた。車いすを押すのは、ユージンと水俣に住み、患者を撮ったアイリーン・美緒子・スミスさん(71)。しのぶさんとの付き合いは、水俣で撮影を始めた 1971 年から 50 年になる。

アイリーンさんは、公式確認から 65 年を経た水俣病の映画が公開される意味をこう語る。『『公害の原点』とされながら、非常識な施策が続く現状を国内外に伝える機会となってほしい。このまま水俣病が終わることは許されない』

環境庁(現環境省)発足の契機となった水俣病は、経済への偏重が辺境で暮らす人びとの人権を脅かす問題を世界に問い続けてきた。水俣病の被害が拡大した 1960 年代、日本は高度経済成長をひた走る一方で「公害先進国」と言われた。67 年制定の公害対策基本法で「経済の健全な発展との調和を図る」とする「調和条項」が盛り込まれ、経済偏重から抜け出せないまま多くの被害者を生んだ。

「脱公害」にかじを切った 70 年の公害国会で条項は削除され、翌年に環境庁が発足した。だが、70 年代後半の世界不況から 80 年代の小さな政府をめざす新自由主義への流れの中で、「日本の公害・環境行政は退潮した」と宮本憲一・大阪市立大名名誉教授(環境経済学)は指摘する。公害研究の先駆者である宮本さんは「水俣病は社会システムが起こす公害の典型例だった」と話す。単に企業の失策ではなく、成長のために企業を擁護し、規制を怠る政治や行政の問題が背景にあったという。

こうして 1 面と 2 面、そして社会面で多くの写真などを入れて、水俣病事件を取りあげている。水俣病は 1956 年 5 月、田中実子さんら数人の患者が「原因不明の病気」として保健所に届けられ、公式確認された。それから 65 年。解決は遠く、被害の全容もわかっていない。写真家ユージン・スミスが水俣の地を踏んでから半世紀、国や世界は MINAMATA とどう向き合ってきたのか。



(2021 年 10 月 5 日)